

一人一人の生きる力の育成につながる学習指導について

佐用町立上月中学校
主幹教諭 伊勢 幸弘

1 取組の内容

はじめに

これからの時代を「厳しい挑戦の時代」「予測が困難な時代」として新学習指導要領の冒頭には記されている。1年前までこの言葉は、数年先の将来について語られていると考えていたものが、新型コロナウイルス感染拡大により、その「時代」がまさに今のことであると痛感している。

先が見通せない現在において、義務教育9年間で子どもたち一人一人の生きる力の育成につながる授業とはどのようなものか、実践事例を紹介しつつ考えていきたい。

(1) 授業：自分で課題を決め最後まで取り組む

授業者の示すねらい(めあて)が、子どもが解決したいと思う問題に変換させることが授業の導入で大切である。そのためには蓄積した授業記録をもとに、集団の実態、個別の支援を必要とする子どもへの配慮、既得の知識技能や学習成果について事前評価し、総合的で緻密な指導計画を立てる。さらに子どもたちの考え方の多様性や個々の課題に柔軟に対応する可塑性及び汎用性の高い教材を選び、子どもの学習意欲を高めるようにする。

[例：スケッチ]

自然の美しさを見つけそれと同じ色を再現する授業である。冒頭に学習課題を2つ示す。1つ目は個々が美しいと感じた色を見つけること、2つ目はその色をどのように再現するかである。色の再現は簡単なようで難しい。これまでの色彩に関する知識を活用し、何度も色を混ぜ合わせながら、「にじみ」「点描」等の技法を活用してスケッチを進めた。



写真のように、子どもたちは試行錯誤し自分なりの答えを見つけようと集中している。子どもの「主体性」を育成するには、子ども自身が判断し行動する「チャレンジ」を授業に組み込まなければならない。

(2) 授業：自他の多様な価値観を尊重し学びを深める

自他を尊重する心の育成は、学級経営をはじめ学校教育全体で推進され、その基盤上に授業の対話的な深い学びがある。

また美術科において、お互いの表現とその価値を認め合う集団をつくるには、3年間の継続的な指導が必要であり、授業者は豊かな学びは安心できる土壌で育つことを忘れてはいけない。

[例：対話から学びを深めるグループ活動]

下図は色の組み合わせについて、グループで意見交換をしている場面である。新型コロナウイルス感染拡大防止のため、現在グループ活動の実施は困難な状況だが、子どもたちは授業中の対話の時間を楽しみにしており、その有用性を感じていることが、授業後の振り返りから読み取ることができる。



生徒の振り返りシートより
美術は自分の思ったことを形や色にして、みんな違う考えがあるんだなあと思った授業だった。また美術の授業で身についた力は、みんなと協働できたり、自分の考えを人に教えてあげたり、逆に他の人の考えをもらったりする協働力や、自分で考える力を身につけた。協働力はこれからの自分に生かせると思う。

自分らしく表現するには自分の見方だけでなく、他者にはどう見えてどう伝わっているかという客観的な視点も求められる。対話は自分の考えにだけにとらわれない思考力・表現力を育てる機会である。そしてそこで生まれるよりよい表現は、自他にとってよりよいものであることで、その価値は一層高まっていく。

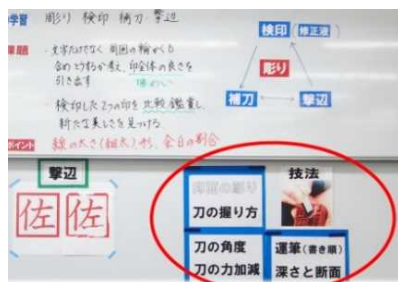
また授業者は「何について対話を進めるのか」を発問で具体的に示すことが大切である。でなければ学習内容に関係ない雑談が続いたり、全体での交流の場面において、価値の共有やその違いを比較して考えを深めていくことが難しいからである。

(3) 初任者及び2年次研修講師等：若手教員の資質向上

教科等指導員(美術)に任命された縁で、令和元年から県立教育研修所において、初任者及び2年次研修の講師として、若手教員の授業力向上につながる助言を行った。

主な内容は学習指導要領の理解をはじめ、下に示す子どもが安心して学びに向かうことができる板書の工夫、ICT等を活用した基本的で汎用性の高い知識技能の提示、さらに思考力・判断力・表現力を伸ばす評価の在り方等である。

板書例



本研修では、初任及び2年次研修受講者から私も学ぶ点が多かった。その例として、子どもと教師の信頼関係に基づく学びの空間づくり、教師の資質向上には教師自身が子どもの発言やその活動から謙虚に学び、常に授業改善を進めることの大切さである。

またこれからの授業は「教え - 教えられる」といった固定化した教師と子どもの関係ではなく、めあて向かって柔軟に子ども同士が学び合う中に教師が入り、教師が指導すればするほど子どもの自由度(思考力・判断力・表現力)が高まっていくにはどうすればいいか考える機会になった。

(4) 提案：コロナ禍の授業の展開について

教科書編集や教師用指導書を作成した教科書出版社の依頼により、緊急事態宣言中の令和2年4月「新型コロナウイルス感染症拡大防止の状況下における授業の展開」と題した原稿を執筆し全国の中学校に配付された。その内容は以下のURLで公開されている。<https://www.nichibun-g.co.jp/chubi/info/1627/>

2 取組の成果

(1) 義務教育9年間を終えるにあたって

私たちは小中学校の学びの系統性を確かなものとし、一人一人にその後の社会でよりよく生きるための資質・能力を育成し義務教育を修了させなければならない。

私はその力がどうついたのか、また子どもたちがどう自覚しているのかを確認するために、義務教育最後の定期考査で次のテーマで生徒に作文を書かせている。

「3年間を振り返り、あなたにとって美術の授業とはどのような時間でしたか。また美術で身についた力が、これからの生活でどう生かされると思いますか。」

[生徒作文]

美術の時間は、友だちと話し合ってたくさんのアイデアを出し、様々な方向から物事を見る機会が多く、とても楽しい時間だった。大きく周りを見渡す力をこれからももっと広くして、いろいろな観点から見られるよう努力したい。将来知らない土地に出るとき美術で学んだ力を活用できたらと思う。

美術の時間を通して、とりあえずやってみようと思うことが増えていった。ミスをしてそのミスから何か思いつくかも知れないと思うことができるようになった。この考えはこれからの生活にも必要な考えだと思う。ミスをおそれていると次に進めないと思うので、美術で学んだことを常に思い出して頑張っていきたい。

今後これらの内容が子どもたちの中で持続し、様々な状況で発揮される力であるとは明言できないが、少なくともこの時にそのような思いを持つことができたことを、ささやかではあるが取組の成果の1つとしたい。また子どもたちの作文は、私の授業への大切な評価であり、それ以降の授業改善に必ず生かしている。

3 課題及び今後の取組の方向

(1) 生きる力の育成につながる評価

美術科の特徴として「その子らしさ」を重視し支援していくことが大切である。ただ一方で義務教育の出口には進学のための入試が現実としてあり、「その子らしさ」は入学選抜の基準にはなっていない。

「その子らしさ」や「指導の個別化」、「学習の個性化」に重きを置く令和の学校教育の流れの中で、いかに評価を一人一人の生きる力の育成につなげていけるかが求められる。その糸口として、単元の終わりや学期末等で一定の基準による総括的な評価(評定)が最重要とする認識を改めることではないかと思う。今後は授業中の形成的評価や数値化できない個々の成長を分析した個人内評価を重視し、「以前と比較してこのような力がついた」、「課題に対し新たな視点で考えるようになった」等を本人や保護者と共有し、粘り強く学習に取り組む主体性や自己肯定感を高めることが、生涯を通して学ぶ生きる力の育成につながると思う。